

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.33 機能訓練を 続ける日々

窓の外を見ると桜の花びらがさらさらと舞い散っている。辺りには花見客の談笑の輪が広がっている。山部はリハ室の窓越しに映える桜並木を通し遙か遠くに思いを馳せていた。

結婚して5年目。やっと授かった愛娘、佳奈は1歳を少し過ぎていた。公園の桜の下でちょこんと座って私のことを「とんたん、とんたん」と言って小さな腕を私の方に精一杯伸ばしている。私が抱き寄せると満面の笑みを返してくれる。隣では妻の友子が手作りの弁当を広げている。

「皆さん楽しそうですね。」

理学療法士の渡部が山部に声をかけた。はるか遠く幸福の絶頂期にいた山部は余儀なく現実に戻された。「そうだね。」少し不機嫌な返事を返した山部の視線は否応なく室内のリハビリ器具に向けられた。

山部聡。52歳。開発事業部の部長を任され順風満帆に進んでいた人

生にある日突然訪れた脳梗塞という現実と言葉に表すこともできないほどの恐怖に直面した。運も味方して今、医療スタッフの懸命な治療もありわずかに筋力が低下する程度にまで回復した。ただただ手足の機能訓練を続ける日々が続いている。

「お陰様で大分歩けるようになりました。」父親ほど離れている山部を担当している渡部は山部の機嫌を損ねたことを察し話題をどうしたものかと身じろいでいるところに傍で見守っていた友子がその場を取り繕った。とは言うものの、山部の歩行はまだぎこちなく太ももを意識して上げなければ左のつま先が床に突き刺さってしまう状況である。山部自身もこれでよく転ばないものだと感心している。ただ、病に倒れたころの事を考えれば雲泥の差で、日々の努力の積み重ねの結果であることも山部自身、実感している。

「あと1か月も頑張ればもっと楽に歩けるようになりますからね。山部さん頑張りましょうね。」

山部は頑張れば普通に生活できるようになるとの思いしかなく一つ一つ与えられた課題を牛歩のごとく愚直に繰り返す日々が続いた。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一